

農林水産大臣賞受賞

超進化への道標～むらに笑顔と活力を取り戻す！

受賞者 かぶしきがいしゃまうんと
株式会社Mt.ファームわかとち

おちやしまつとちよう
(新潟県小千谷市真人町)

■ 地域の沿革と概要

おちやし小千谷市は新潟県のほぼ中央に位置し、日本一の大河・しなのがわ信濃川が市の南東部から北東部へと流れ、その信濃川が生み出した全国でも類を見ない規模の河岸段丘が特徴である。

また、ながおかし長岡市やとおかまちし十日町市に隣接した国内有数の豪雪地帯としても知られており、冬季は積雪量が3mを越し、国土交通省が指定する「特別豪雪地帯」の指定区域（2020年時点）に入っている。

地名の由来は、平安時代のわみょうしやう「和名抄」

に見られる古代魚沼郡の4つの郷のうちの一つ、「ちやごう千屋郷」が起りと言われている。近世になると、街道が合う立地であったことから宿場町となり、信濃川水運の船着場、ちぢみ小千谷縮の生産地としても発展。明治22年の市制町村制施行を経て、昭和29年に小千谷市が誕生した。

関越自動車道や国道、JRなどの交通網も充実。冬には豪雪に見舞われる厳しさと、その雪解け水がもたらす美しい自然や田園のなかで、小千谷特有の文化や産物を育み、多彩な産業活動が息づいている。

■ むらづくりの概要

1. 地区の特色

わかとち若栃地区は、小千谷市中心街から車で約15分、小千谷市南部の十日町市に近い標高約200mの山間部にあり、まつと真人ムジナ伝説が残る5つの集落（わかとち若栃、やまにた山新田、しのさわ市之沢、せりくぼ芹久保、きたやま北山）からなる。

平成16年10月23日の新潟県中越大震災では、全45世帯が損壊、棚田が

第1図 位置図



崩れるなどの被害を受けた。かつて、約 70 戸人口 300 人ほどであったが、震災後は 43 戸 170 人ほどに落ち込んだ。過疎化・高齢化が進んでいるものの、夏は小千谷三大花火の 1 つ「若栃大花火」、秋は五穀豊穰を祝う「若栃大田楽」等のイベントが開催されている。

また、中山間地域等直接支払制度に取り組み、地区内にある約 38ha・400 枚もの棚田を保全している。

2. むらづくりの基本的特徴

(1) むらづくりの動機、背景

平成 16 年に発生した中越大震災では震度 6 強の揺れに襲われ、多くの家屋や農地が大きな被害を受けた。震災の翌年、復旧が遅れている中で地区の小学校が閉校し、地区の活力が失われていくのが感じられたことから、この状況を何とかしようと有志 5 人が集まり、平成 18 年、地区の活力を取り戻す活動を開始した。



写真 1 地震の被害

そして、小千谷市から廃校の利用を提案されたことを契機に、関係機関・団体の支援を受けながら集落内に呼びかけた結果、38～78 歳までの有志 30 人（半数は女性）が参加し、地域活性化に向けて話し合う「わかとち未来会議」を発足した。

わかとち未来会議で廃校の後利用を含めた地域活性化について検討した結果、①廃校を民宿に改修してグリーン・ツーリズムを推進する、②イベントの充実により知名度を上げて訪問者を増加させる、③それらに伴い特産品を開発・販売する、などのアイデアが出され、事例視察や議論が重ねられた。

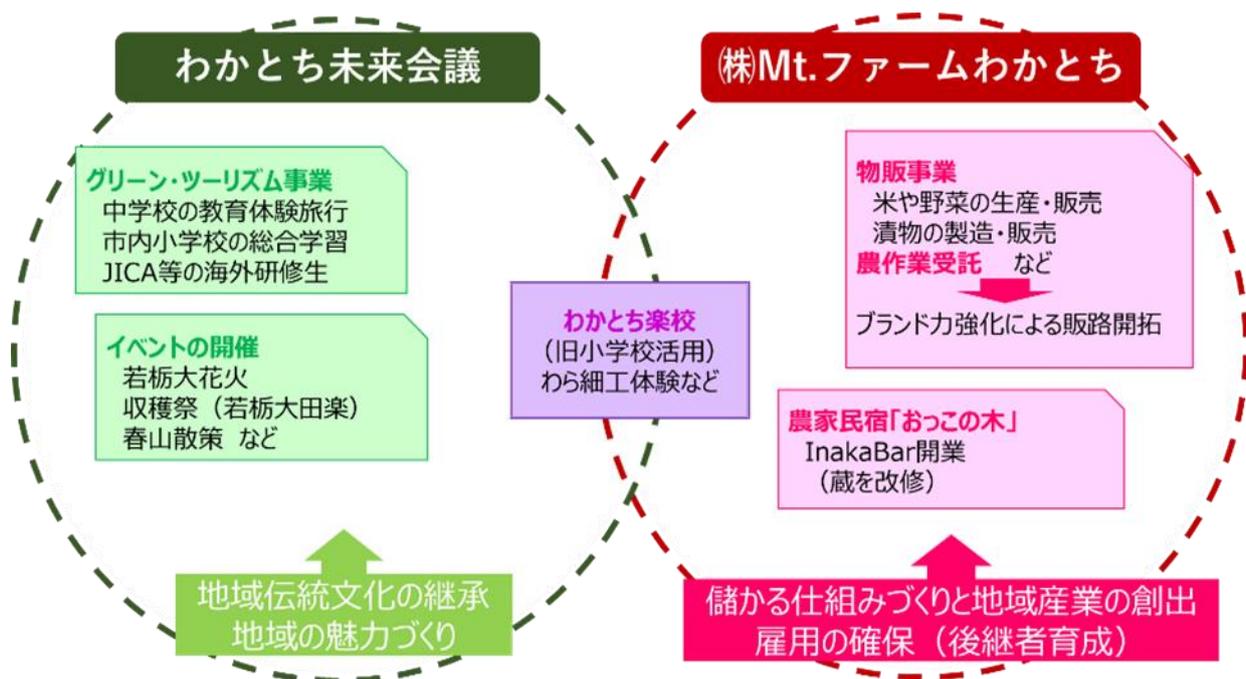
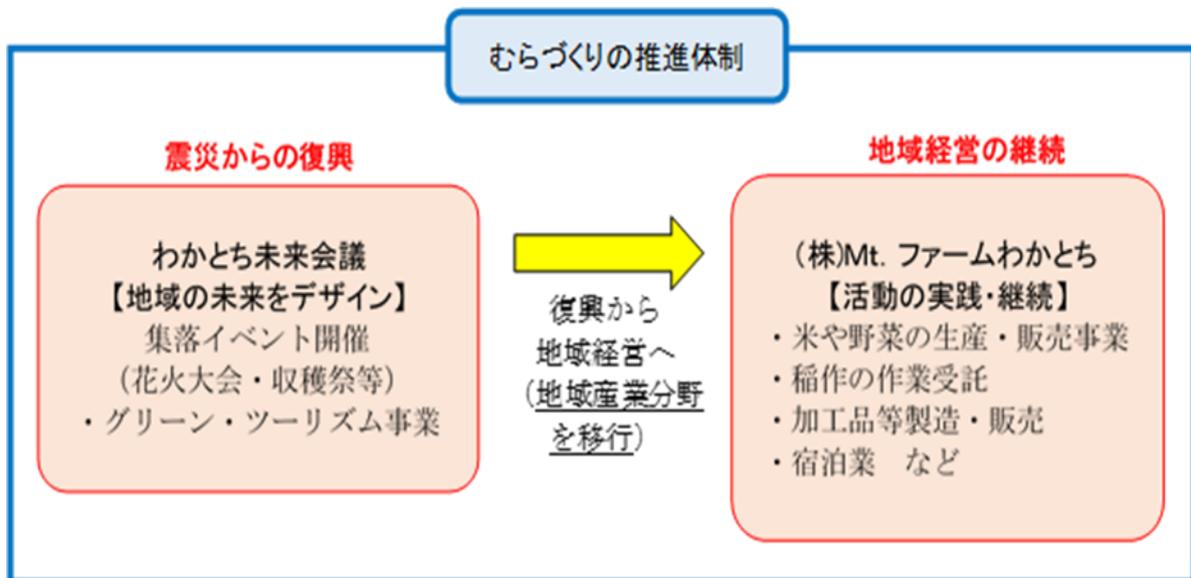
わかとち未来会議で出し合ったアイデアの実現についてさらに検討するため、平成 19 年 1 月から、NPO 法人まちづくり学校のコーディネーターを迎え、「未来デザインワークショップ」を開催した。ワークショップという言葉を知らない住民もいた中、2 ヶ月という短期間で集中して 25 回ものワークショップを積み重ね、住民が多くの意見を出し合い「わかとち未来デザイン・実践プラン」を策定した。

(2) むらづくりの推進体制

中越大震災の直後は、有志で構成する「わかとち未来会議」が中心とな

り、地域活性化に向けて取り組むべき方向性を検討してきた。その後、震災からの復興が進むにつれ、わかとち未来デザイン・実践プランで描かれた将来像の実践や取組は、新たに設立された「株式会社Mt. ^{かぶしきがいしゃまうんと}ファームわかとち」に引き継がれ、現在はこの法人が地域経済を支える基盤の役割を担っている。

第2図 むらづくり推進体制図



■ むらづくりの特色と優秀性

1. むらづくりの性格

中越大震災での被災や、その翌年の若栃小学校の閉校と暗い話題が続き、地域に元気が感じられなくなったことに危機感を持った有志が自発的に設立した「わかとち未来会議」では、ワークショップで地域の将来プランを策定し、その実現のために様々なイベントを通じて地区の魅力づくりや伝統文化の継承等に取り組んできた。

わかとち未来会議は、発足から16年が経過し、高齢化等により活動を縮小しつつあるが、これまでの活動の中で設立された「(株)Mt.ファームわかとち」がわかとち未来会議の役割を引き継ぎ、現在、集落の農地を守るための後継者の確保・育成や、若い世代の雇用や地域で収入が得られる仕組づくりに取り組んでいる。

2. 農業生産面における特徴

(1) 当該集団等の農林漁業生産、流通面の取組状況

ア コミュニティビジネスの展開による地域で儲けられる仕組づくり

(株)Mt.ファームわかとちが加工品等製造事業を引き継ぎ、「若栃」ブランドの統一感あるパッケージの採用、ECサイト等の展開など販売強化が図られ、加工品の売上が大きく向上した。



写真2 若栃ブランド商品

地元住民が収穫する山菜や農産物を加工原料として同社が買い上げており、地域の高齢者等も収入が得られる仕組になっている。

<売上 平成25年：9,000千円 → 令和元年：35,000千円>

イ 新たな商品づくり

地元の魚沼コシヒカリに付加価値をつけて販売していくため、新たにパックごはんを製造し、同社で販売しているほか、ふるさと納税でも取り扱っている。

ウ 農家民宿「おっこの木」への食材提供

平成22年にオープンした農家民宿「おっこの木」で、地元で採れた魚沼コシヒカリや山菜、旬の野菜等を使った田舎料理を食事として提供している。

(2) 当該集団等による生産力の向上、生産の組織化、生産・流通基盤の整備

等への寄与状況

ア 農産物の加工製造と販売

地区の農産物を活用したレンジアップご飯、もち、漬物などの販売事業を中心に経営強化を進めており、新たな雇用創出が期待されている。

イ 離農者を抑制させる取組

高齢化による離農者の農地の受け皿となるよう法人が設立されたが、地域の離農者を少しでも抑制させるため、圃場の水管理や畦畔の除草などの作業は地権者に再委託し、地権者と協力しながら農地を管理している。

(3) 当該集団等の活動による構成員等の経営の改善、後継者の育成・確保、女性の経営参画の促進状況等について

ア インターン生の受入による「若栃」の発信

都市部の若者をインターン生として受け入れる「イナカレッジ」や「アグリパス」といったユニークな仕組を活用して外部人材を受け入れることで、地域の営農活動が維持され、集落の農地が守られている。



写真3 インターン生による蔵改修プロジェクト

インターン生は、農村生活や農業を体験するだけでなく、若栃の米づくりを紹介する冊子を自ら作成したり、日常の動画をYouTubeに掲載したりするなど、若栃の魅力を発信する力となっている。米づくりの冊子を訪問客に送ったところ、お米の定期購入額が2倍以上に増加したという直接的な効果も生じている。

インターン生の存在により、(株)Mt.ファームわかとちの社員をはじめ研修に関わる住民が、外部人材の受け入れに気持ちが前向きになるなど、良い影響を受けていると評価している。

3. 生活・環境整備面における特徴

(1) 当該集団等の農林漁業生産、流通面の取組状況

ア 古民家を改装した農家民宿「おっこの木」

グリーン・ツーリズム事業による学生や町内イベントの参加者などの受け入れを経験し、解体される予定になっていた築160年の古民家をわかとち未来会議が購入・改装し、平成22年に農家民宿「おっこの木」の営業を開始した。

<農家民宿宿泊利用者数 平成25年：350人 → 令和元年：450人>

(2) 当該集団等による生活条件の改善・整備、コミュニティ活動の強化、都市住民の交流等への寄与状況

ア グリーン・ツーリズム事業による交流人口の拡大

JICAの海外研修生、中学生教育体験旅行や市内小学校の総合学習などを集落内の農家で受け入れ、新たな交流が生まれることで集落が活気づくとともに、住民が集落を再評価することにもつながっている。

イ 伝統文化の継承

中越大震災で大きな被害を受けながら、集落で前を向こうと始められた収穫祭では、昔、日本各地で行われていた幻の伝統芸能「田楽」を現代風にアレンジした「大田楽」が披露されており、文化継承の貴重な場となっている。

ウ 地域資源・伝統技能を活かした特産品の開発・販売

昔から受け継がれてきたしめ縄づくりは、震災を契機に継承が困難となったが、地域のビジネスモデルとなるよう「しめ縄工房 若栃」を立ち上げた。工房で作られるしめ縄は市外だけでなく東京の在住者からも注文があり、リピーターも多い。

また、しめ縄づくり体験会を実施し、その魅力を伝えている。これらの活動により、工房に参加する住民のやりがいや、冬期間の収入確保につながっているほか、一度消滅しかけた技術を継承できる体制が整っている。

(3) 当該集団等の活動による地域定住促進、女性の社会参画の促進状況について

ア 蔵を改修した「InakaBar」

農家民宿「おっこの木」の近くにある、使われていなかった蔵を1年間掛けて交流施設に改修し、地域内外の人が気軽に集まれる場をつくり、宿泊者以外も含めた交流を図っている。

イ 地元女性＝「しゃべっちょ」（話好き）の活躍

震災の後の「わかとち未来会議」発足時には、有志30人が集まり、半数は女性であった。また、グリーン・ツーリズム事業及びイナカレッジ、アグリパスによる外部人材の受け入れに際しても、積極的に若者を受け入れ、「しゃべっちょ」な故郷の母として明るく和やかな滞在時間を提供している。



写真4 JICA研修生と地元女性たち